

樹林、河川、草地、谷戸、溜池といった名前であらわれるビオトープは、地域、地形や人の利用によってさらに多様なタイプに細分化されます。私は、仕事で少々、ビオトープ作りのアイデアを考えたり、ビオトープの調査をする関係で、個人的にどこかへ出かけた場合でも、時折風景を見て、勝手に「タイプのビオトープかな」と考えることがあります。私の住まいは多摩丘陵にあります。ここでは急速な開発によって多くのビオトープが姿を消しています。しかしおなじみの風景のなかには、まだこの地域特有のタイプのビオトープが残されており、そこはビオトープの教材としても大事なんじゃないかと思えます。ここでは、私の好きな小さな谷戸の6月ごろの生き物の様子から、その谷戸のビオトープのタイプを考えてみることにします。

谷戸の入り口付近には水田、畑地が広がっています。水田は排水の良い乾田ですが、今は水が入っています。シオカラトンボが旋回飛翔し、足下の水面に眼を移すと自分の歩く振動を感じたのか、アマガエルのオタマジャクシが一斉に遠くへ泳いでいく様が見えます。道端、畑地脇の草地には、ヨモギ、タンポポ、ハルジョオンといった背の低い草本が生えています。平地の里のビオトープといえよ



ある日のフィールド・ノートから

谷戸の風景

いでしょうか。

谷戸を奥へ進むと、さらに細い谷が右、左と分かれています。左の谷戸は、途中まで段々の水田、脇にごく細い水路、谷戸の奥には高茎のヨシ草地や薄暗い湿地があります。水田にはシュレーゲルアオガエルのオタマジャクシ、畦には陸に上がったばかりのアカガエルが飛び跳ねています。水田には他にマルタニシ、ヘイケボタルの幼虫、ホトケドジョウの子供など。水田上をオオシオカラトンボが連結飛翔し、アジアイトトンボが稲に止まっています。静かにしていると

ツチガエルの鳴き声も聞こえてきました。地下水位が高く冬も水が残るこの水田では、さっきの入り口の水田より多くの生き物がいるようです。水路にはカワニナ、ホトケドジョウ、サワガニ、奥の草地にはカヤネズミの巣もありました。ここは、水に恵まれた谷戸の地形条件のもとに、多様な環境の要素が配置されています。多くの生き物が棲む、多摩丘陵本来の谷戸のビオトープと呼んでいいかもしれせん。

今度は、右の谷へ入ります。ここはさっきの谷戸よりやや大きいのですが、水田放棄地が続いて、大体高茎のヨシ草地になっています。谷戸の中を見通すのは困難です。谷戸のヨシ草地タイプ、簡単に決められそうです。さっきの谷戸と土地の条件はそんなに変わらないでしょうが、見た目にもかなり違って

います。優劣は別にして、谷戸という地形において、条件の違いで異なったタイプが成立するという一例だと思います。

いろいろなタイプのビオトープが姿を消しつつありますが、まず周囲のビオトープのタイプを観察し、その成り立ちやそこに棲む生き物との関係を考えることは、今後いろんな地域のビオトープを復元する時に役に立つのではないのでしょうか。(本生生態技術研究室・裏戸秀幸)

野生生物や自然環境等について真剣に考えている人たちの様々な活動・団体がたくさんある。そうした中に貴重な情報が蓄積されている場合があるのをご存じだろうか。最近、新たにそうした団体が誕生した。「リス・ムササビネットワーク」である (tel & fax : 045-961-7638/E-mail: B X Q 0 1 7 4 7 @niftyserve.or.jp)。プロ、アマを問わず、研究者や純粋に興味を持った人等が交流、情報交換することを目的としている。会報第1号が出ているので興味のある方は御一読を。(中村) 写真には、撮り手の被写体に寄せる気持ち(多少なりとも)表れる。「美しく撮ろう」と「ああなんてきれいなんだろう」とでは、やっぱりちがう。内野秀重さんの植物写真は、四角く切り取られたその空間の周りの風景も見せてくれる。新作写真集「草のいろ木のかたち」は、どれもつつましい輝きをはなつ逸品。「カワラノギク」からは秋のいい匂いまでしてくる。(南谷)

【発行】.....株式会社地域環境計画

発行人.....高塚敏

編集.....南谷佳世・中村兼吉

東京本社

〒154 東京都世田谷区桜新町2-22-3 NDSビル

TEL 03-5450-3700 / FAX 03-5450-3701

営業窓口.....逸見一郎

大阪支社

〒569-11 大阪府高槻市古曽部町1-1-8

TEL 0726-84-3182 / FAX 0726-84-3184

営業窓口.....中山香代子・津田洋子